

和刻本『大明三藏聖教目録』諸本再考

會谷佳光

はじめに

『大明三藏聖教目録』四卷は、日本では江戸時代に刊行された黄檗版大藏經（以下称「檗藏」）の収録經典目録として知られているが、もともとは明代後期に嘉興版大藏經（以下称「嘉興藏」）に収録・刊行されていたものである。その内容は、明代の官版大藏經である北藏の正藏・続藏、及び北藏に収録されていない永楽南藏の収録經典リストからなり、正藏・続藏部分の収録經典の上には永楽南藏の千字文が注記されている。言うなれば永楽南藏対照北藏目録である。

嘉興藏の収録經典の一つとして『大明三藏聖教目録』四卷が刊行されたのは、万曆二十九年のことである。その後、嘉興藏の分類法が紆余曲折の末に北藏を踏襲することになったのに伴い、『大明三藏聖教目録』は永楽南藏対照北藏目録としてではなく、嘉興藏の目録として用いられるようになったと見られる。⁽¹⁾ さらに近代に入り、一九二九年に『昭和法宝総目録』第二卷に北藏の目録として収録されて以降、広く世に知られ、現在各所に伝わる嘉興藏や檗藏の

現存經典目錄を編纂する際にも利用されている。

本目錄には版本を異にする二系統の和刻本があり、それぞれに後印本・後修本が伝わる。その版本の系統については、二〇〇七年四月に『成田山仏教図書館報』復刊第七十六号誌上で『大明三藏聖教目錄』の異版と後印」と題する論文を発表したことがある。しかし紙数の都合により、割愛した部分が少なくなかった。その後、東洋文庫の新収蔵資料、書店から購入した家蔵本、台湾の中央研究院所蔵本等、様々な印本を調査する機会を得た。これによって日本における『大明三藏聖教目錄』の出版状況について新たに知るところがあったので、早くに改稿しようと思いつつも、つい手を付けきれずにいた。

ところが最近になって、前稿が刊行されて、わずか三ヶ月後の二〇〇七年七月に、高井恭子氏が『黄檗文華』第百二十六号（二〇〇五—二〇〇六）誌上で「黄檗版『大明三藏聖教目錄』の成立と刊行—日本黄檗と宗旨の関係から—」と題する論文を発表していたことを知った。さっそく入手してみたところ、『大明三藏聖教目錄』の版本六点について、それらの内容構成上の異同から改訂の痕跡を辿ったものであった。調査対象とした版本には、前稿と高井氏との間に一致するものは一点もなかったが、諸本の系統に関する結論においては、おおむね一致する結論を得ていたことがわかった。また高井氏の調査によって初めて知り得たことがある一方、その諸本に対する考察には少なからぬ誤りが見受けられた。そこで前稿を基礎に、高井氏の調査結果を参考・是正しつつ、筆者が新たに調査した諸本を加えて、和刻本『大明三藏聖教目錄』の版本系統について再考を試みたい。

江戸時代の和刻本

江戸時代に開版・印造された『大明三藏聖教目録』には、槩蔵の目録に使われた黄槩版（以下称「槩蔵目録」）と、天海版大藏經の千字文を首書する等した町版（以下称「天海版対照目録」）の二系統がある。以下にそれぞれの内容構成と後印本・後修本の特徴について考察してみたい。

1 槩蔵目録

槩蔵は、寛文九年から天和元年にかけて鉄眼道光の発願募縁によつて宇治黄槩山万福寺の塔頭寺院である宝蔵院で開版された大藏經である。その底本には主に嘉興蔵が用いられているが、中には欠本等の理由によつて既存の和刻本の版木で代用された經典が含まれている。この代用經典は時代が下るに従つて、次第に嘉興蔵の覆刻本に改刻されていったことが確認されており、近年の槩蔵研究者はこの代用經典を「入れ版」と呼び、その底本や改刻の時期・背景等について盛んに研究を行っている。⁽²⁾ 本稿で取り上げる『大明三藏聖教目録』は、槩蔵の開版当初から嘉興蔵本の覆刻本が納経されており、入れ版が用いられた形跡はない。それがここで取り上げる槩蔵目録である。

槩蔵目録の諸本について述べる前に、まずその底本である嘉興蔵本の書誌を挙げておく。⁽³⁾

大明三藏聖教目錄四卷大明続入藏諸集一卷北藏欠南藏函号附一卷 万曆二十九年径山寂照庵刊本 全一冊

双辺縦二十二・七横十四・三⁽⁴⁾ 有界十行二十字小字双行注

首「北藏目錄総」次「藏函号字附」⁽⁵⁾次永楽八年「大明太宗文皇帝御製藏經讚」次唐中宗「大唐竜興三藏聖教序」次宋太宗「大宋三藏聖教序」次「大明三藏聖教目錄卷第一」以下至卷第四 次永楽九年「御製藏經跋尾」次万曆十二年「御製続入藏經序」次「大明続入藏諸集」次「北藏欠南藏函号附」卷第一至第三併北藏欠南藏函号附之卷末有万曆辛丑秋八月径山寂照庵刊記 版心題「大明三藏聖教目錄」版心上部「北藏」「支那撰述」「經」「律」「論」「印度著集」「支那撰述」版心下部千字文墨丁 題簽「北藏 大明三藏聖教目錄〈全〉南藏函号附」■

檠藏目錄はどの時期の印本もこの嘉興蔵本とほぼ同じ構成となっているが、以下の点が異なる。

- 一、巻首の第一丁表に檠蔵特有の扉絵（図1）、裏に願文があり、巻尾の末丁表に韋駄天像がある。
- 二、嘉興蔵の覆刻部分の前後に鉄眼道光の手になる文章を収載する。
- 三、嘉興蔵本の刊記を覆刻していない。

檠蔵目錄は無刊記本であるが、鉄眼の文章を収載する点、現在各所に所蔵される檠蔵本体とともに納経されている点から、⁽⁶⁾宝蔵院で檠蔵の一部として開版されたものと見て間違いない。また江戸時代においては、檠蔵の名を冠した目錄は刊行されておらず、この嘉興蔵本の覆刻本が檠蔵の目錄として使われていたようである。本稿でこの版を「檠蔵目錄」と呼ぶのは、そのためである。

さて、槧藏目録には、管見の限り、版木を同じくする四種の印本がある。

・寛文九年至延宝六年刊初印本

・延宝六年至七年修本

・天和元年修本

・享保八年修本

この四種の印本は、鉄眼の文章の収録数、墨丁の有無、附録の位置の違いで見分けることができる。そこで、この三点に着目して、四種の印本の特徴、及び印刷時期とその背景について考えてみたい。なお本稿末に【和刻本『大明三藏聖教目録』諸本対照表】を付したので、随時参照されたい。

寛文九年至延宝六年刊初印本には、東洋文庫藏本（請求記号Ⅲ—一二—A—八二〇）がある。

題簽は、第一冊が「北藏 大明三藏聖教目録（南藏函号附）■」に作り、第二冊は「大」字以下欠。第一冊には卷首と巻第一、第二冊には巻第二以下を収める。槧藏目録には他にも二冊本が存在するが、いずれも巻第二と巻第三の間で分冊しており、巻第一と巻第二の間で分けるものは他にない。

鉄眼の文章には、寛文九年七月に大藏經の開版を発願した時に書いた「刻大藏縁起疏文」、延宝六年七月に槧藏の初印本を後水尾法皇に寄進するために書いた「進新刻大藏經表」、天和元年冬に完成した槧藏を將軍徳川綱吉に寄進するために書いた「上大藏經疏」の三篇があり、印本によって、その収録数と位置が異なる。東洋文庫藏本は扉絵（表）・願文（裏）の二丁の次に寛文九年「刻大藏縁起疏文」一篇を収録するのみである。

「刻大藏縁起疏文」執筆の目的は、その末尾に、

伏願十方宰官長者善男信女、各各生難遭想、發広大心、或助三函五函、或資一言半偈、普結般若之縁、成此殊勝之事、俾法輪常転、永祚邦基、則予生生報仏之恩、獲少酬爾。

とあるように、槧藏出版費の寄進を募るためであった。

墨丁とは、版木を彫り残して後で補刻できるようにした部分のことで、印刷時には黒く刷りつぶした状態になる。⁽⁸⁾ 槧藏目録では、東洋文庫藏本と延宝六年至七年修本に墨丁が多く、全部で五箇所ある。

一つ目の墨丁は、「藏函号字附」第十八丁表第三行の、小字双行右行第五字の「史」字以下から左行にかけて存在する(図3)。嘉興藏本でも、この部分にはほぼ同じ形の墨丁があるから、宝藏院ではこれをそのまま覆刻したと見てよい。「藏函号字附」は、「大藏経(北藏)の函号に用いた千字文」の意であり、北藏の整理番号として使用された千字文六百七十七字を列記したものである。このうち「天」字から「石」字の六百三十六字が正藏部分、「鉅」字から「史」字の四十一字が続藏部分に当たると、嘉興藏本で「史」字以下が墨丁となっているのは、北藏に続藏や又続藏が新たに追加された際に対応できるようにしたためと推測される。宝藏院はこれを忠実に覆刻したにすぎない。

残りの墨丁は、巻第一の前にある「北藏欠南藏函号附」第十八丁表(図5)と、巻第一第二の末丁裏にある。また東洋文庫藏本は巻第三第十八丁以降が落丁であるが、延宝六年至七年修本では第二十丁まであり、その表の第五行から第十行が墨丁である。よって東洋文庫藏本と同時期に印刷された落丁のない印本には、同じ箇所墨丁があった可能性が高い。嘉興藏本では、これらの墨丁がある箇所、いずれも万曆二十九年刊記が刷られている。槧藏の所収経

典にはしばしば嘉興藏本の刊記に倣って鉄眼の刊記⁹が刷られているから、槧藏目録においても後日嘉興藏本に倣って鉄眼の刊記を彫ることができるよう、墨丁として残しておいたものと考えられる。

嘉興藏本には、巻第四卷末の永樂九年「御製藏経跋尾」の後に「大明統入藏諸集」（首に万曆十二年「御製統入藏経序」あり）・「北藏欠南藏函号附」が附録されている。その丁付けは第二十三丁から第二十八丁となっている。これに対し、東洋文庫藏本ではこれら附録を巻首の御製序三通（明の永樂帝・唐の中宗・宋の太宗）と巻第一との間に置き、その丁付けは御製序三通に続けて、第十三丁から第十八丁となっている。しかしながら『大明三藏聖教目録』の目次に当たる「北藏目録総」では、嘉興藏本と同じく、巻第四卷末の「御製藏経跋尾」の次に「大明統入藏諸集」を置いている。よって槧藏目録が開版される際に、その位置を誤ったものと考えられる。この誤りは、「北藏目録総」を確認すれば犯すはずのない性質のものである。このことから槧藏目録が相当急いで開版されたことが窺われる。

槧藏目録の印本四種の版面の状態を比較すると、この東洋文庫藏本が最も早印である。また東洋文庫藏本には寛文九年「刻大藏縁起疏文」があるだけで、延宝六年「進新刻大藏経表」と天和元年「上大藏経疏」が収録されていない。以上の点から、この早印本は寛文九年以後、延宝六年以前に開版されたものであると推測される。この時期は槧藏出版の最初期に当たりますが、当時開版を急いだ理由を推し量ると、本書を発刊予定目録として頒布することで、出版費用の寄進や購入希望を募ろうとしたのではないかと思われる。

なお高井氏の調査した諸本の中には、寛文九年至延宝六年刊初印本に該当するものはなく、今のところ、これと同時期の印本は他に見つかっていない。

延宝六年至七年修本には、智積院三十八世頼如旧蔵の成田山仏教図書館蔵本（請求記号四九—九六（口）、二冊）・
 関西大学図書館蔵本（請求記号L二三—C—六八一—九、一冊）がある。

成田山仏教図書館蔵本は、寛文九年「刻大蔵縁起疏文」を巻尾に回し、巻首には新たに延宝六年七月「進新刻大蔵経表」を収録している。その文中に「臣聞、闡演真詮、良繇于釈子、流通大法、誠頼乎国王。」「本邦素称仏地、帝王重法、弗垂支那。況我今上皇帝太上法皇陛下迺古聖重来、今仏応現。」「謹奉経随表上進以聞。」等とあることからわかるように、鉄眼が槩蔵を流通させるために、靈元天皇（今上皇帝）と後水尾法皇（太上法皇）の威光によってろうと、槩蔵にこの表を付して上進したものである。なお、この時上進された槩蔵（初刷本）は後水尾法皇によって法輪山正明寺（滋賀県）に下賜され、その後も数度に渡って納経され、天和元年頃までに全蔵が完納された¹⁰。

また成田山仏教図書館蔵本では、先述の初印本の構成上の誤りに対して、「北蔵目錄総」に合わせて「御製続入蔵経序」等を巻尾に移し、その丁付け「十三」から「十八」を、「二十三」から「二十八」に改めている。はつきりとはわからないが、おそらく「十」字の上に「二」字を埋め木したのであろう。これに加えて、この印本には天和元年「上大蔵経疏」がいまだ収録されていない。以上の点から、「進新刻大蔵経表」が執筆された延宝六年以降、「上大蔵経疏」が執筆される天和元年以前に、初印本に補修を施して印刷されたものと見られる。

一方、関西大学図書館蔵本は、「御製続入蔵経序」等の位置、その版心の丁付け、墨丁の状態が成田山仏教図書館蔵本と同じである。これらの点によれば、成田山仏教図書館蔵本と同時期の印本のように見受けられる。ところが、この時期の印本の特徴である「進新刻大蔵経表」が巻首に収録されていない。その原因は、次のように考えることが

できる。関西大学図書館蔵本では、「北藏目録総」の前に「刻大藏縁起疏文」の第二丁があり、その第一丁は冊の末尾に綴じられている。この「刻大藏縁起疏文」の誤綴じは、この印本に対してかつて改装が行われたことを示している。よって「進新刻大藏経表」は、改装の際に失われたと推測することができるのであって、この異同を除けば、関西大学図書館蔵本は成田山仏教図書館蔵本と一致するのである。

ところで関西大学図書館蔵本の「刻大藏縁起疏文」第二丁末尾には、次の識語が書き込まれている。

紀州牟婁郡熊野山崎十右衛武秀室源氏延宝七己未季夏香儀／奉請是／大明三藏聖教目録全部四卷／天和三癸亥冬十二月二十三日／独遊林無尺藏閣識

この一文は、紀州牟婁郡（現在の三重県北牟婁郡・南牟婁郡、和歌山県西牟婁郡・東牟婁郡）熊野の山崎十右衛武秀の妻源氏が延宝七年季夏に『大明三藏聖教目録』四卷を奉請したことについて、天和三年冬に独遊林無尺藏閣（未詳）で記したものである。この識語によれば、関西大学図書館蔵本は延宝七年六月頃印刷された可能性が高い。

以上の点から、初印本が補修された時期は、延宝六年七月から翌年六月の一年間に絞ることができる。また嘉興蔵本と最も内容構成が近いのは、初印本の誤りを正した、この延宝六年至七年修本である。なお高井氏が調査した諸本のうち、黄檗山万福寺塔頭獅子林院蔵本は、その内容構成から判断して、延宝六年至七年修本と見られる。

天和元年修本には、東京大学総合図書館蔵本（請求記号C40—1931、原装二冊改装一冊）・方法山帰一寺（静岡）旧蔵の家蔵本（一冊）がある。

この印本の特徴は、初印本・延宝六年至七年修本に見られた墨丁が全てなくなっている点にある。

「藏函号字附」末にあった墨丁には、千字文「合濟弱扶密勿多士雞田赤城昆池碣塞」十六字が彫られている(図4)。この十六字の千字文は、いずれもすでに「北藏欠南藏函号附」に見えるものである。「北藏欠南藏函号附」は、北藏に収録されず永楽南藏に収録される經典の千字文・經名・卷数を列記した部分である。この部分は、北藏本『大明三藏聖教目録』にもともと含まれていたものではなく、嘉興藏本『大明三藏聖教目録』の開版時に作成・附録されたものと考えられる。⁽¹¹⁾ 天和元年修本の「藏函号字附」に、「北藏欠南藏函号附」の千字文が追刻されたという事実は、北藏に欠く永楽南藏の収録經典を、嘉興藏に做って、槧藏に入藏・刊行することが決まったことを示している。⁽¹²⁾

また巻第一第二第三及び「北藏欠南藏函号附」にあった墨丁には、界線が彫られている(図6)。槧藏の収録經典には、先述のように、嘉興藏の巻末に見られる刊記に倣い、巻末に募縁者等を記した刊記が刷られていることがままある。天和元年修本において墨丁のあった部分に、刊記ではなく、界線が彫られたという事実は、この時期に至って槧藏目録の各巻巻末に刊記を刷らないことが決まったことを示している。

以上のように、墨丁がなくなった背景のひとつとして、槧藏出版の概要が定まり、槧藏目録の内容に不確定な部分⁽¹³⁾がなくなったことが影響していると想定されるのである。

もうひとつの背景として想定されるのは、第五代將軍徳川綱吉への槧藏寄進である。⁽¹³⁾ この印本には、天和元年冬に鉄眼が執筆した「上大藏經疏」が、巻首「進新刻大藏經表」の後に、初めて収録されている。「上大藏經疏」は、檀信徒に出版資金を募って開版した大藏經を千載に流通させるため、將軍家の威光にすがらんとし書かれたものである。⁽¹⁴⁾ これ⁽¹⁴⁾が槧藏目録の巻首に付されたということは、鉄眼が槧藏と一緒に槧藏目録を献上するつもりであったことを

示唆する。⁽¹⁵⁾ 当時の槧蔵目録には各巻巻末に墨丁が残されていたが、墨丁の存在は未完成であるかのような印象を与えかねない。そこで界線を彫る等して、急遽墨丁をなくした可能性が出てくる。このように徳川綱吉への槧蔵寄進が、槧蔵目録中から墨丁がなくなった、もうひとつの背景として想定されるのである。

以上の点から、この印本は天和元年の槧蔵完成後まもなく、槧蔵と一緒に將軍家に寄進するため、延宝六年至七年修本に補修を施したものと考えられる。

高井氏が調査した華蔵寺（愛知）蔵本は、その内容構成から判断して天和元年修本と見られる。華蔵寺には元禄十五年二月に全蔵が一括して納経された槧蔵があり、華蔵寺蔵本はこの槧蔵と一具のものと思われる。⁽¹⁶⁾ 高井氏は、華蔵寺蔵本の巻第三が「十九丁左十行で終了」し、「「陛南昔字阿毘達磨法蘊足論十二卷今作十卷」および「「南聚字立世阿毘曇論十卷」」を収録するとしている。しかし大谷大学図書館所蔵の嘉興蔵本、及び筆者の調査した槧蔵目録では、東洋文庫所蔵の初印本が巻第三の第十八丁以下を落丁で欠くのを除き、巻第三はいずれも第二十丁表に『阿毘達磨法蘊足論』・『立世阿毘曇論』を収録して終わっており、この二論を第十九丁に収録する印本は未見である。あるいは高井氏の記録違いかもしれない。

享保八年修本には、国立国会図書館蔵本（請求記号一六八―一一、原装二冊改装一冊）・上越教育大学図書館蔵本（請求記号一八三―〇一一―二七五、二冊）⁽¹⁷⁾がある。

その構成は天和元年修本とほぼ同じであるが、ただ一つ異なるのは、「北蔵欠南蔵函号附」第二十八丁表の界線が刷られていた部分に、「大日本著述附」が四行に渡って刷られ、「御覧」として鉄眼とその法弟宝洲の語録が著録され

ている点である（図7）。

国立国会図書館蔵本は、匡廓・界線の痛み具合等から見て、天和元年修本より後印である。よって墨丁に「大日本著述附」を一旦彫ってから、これを削って界線だけ残した可能性はない。国立国会図書館蔵本では「大日本著述附」とその周囲の版面との間にほとんど刷り具合の違いが見られないが、上越教育大学図書館蔵本では若干界線の切れ目が確認でき、明治期以降の印本（後述）になると、墨ののり具合の違いや界線の切れ目等がはっきりと現れており、埋め木の痕跡を確認できる。おそらく天和元年修本がある程度流通した後に、槩蔵出版の中心人物である鉄眼・宝洲の語録を、槩蔵の最後に収録して上進することが決まり、版本に「大日本著述附」を埋め込んだのであろう。

「大日本著述附」を埋め木した時期については、『鉄眼禪師遺録』¹⁸巻首の享保八年宝蔵院第三十五世釈玄髓「上瑞竜鉄眼宝洲二禪師語録表」末に見える次の一文によって知ることができる。

伏願、陛下容臣螻蟻之志、鑒臣艸芥之誠、緡二録之卷帙、塵一夜之御覽、非特光聡二人（鉄眼・宝洲のこと）蒙聖恩、使其子孫万世感天慈。臨表無任激切屏營之至。臣僧玄髓謹上二録奉表以聞。

この上表文から、鉄眼と宝洲の語録は、享保八年に宝蔵院第三十五世玄髓によって時の天皇、中御門天皇に上進されたことがわかる。¹⁹国立国会図書館蔵本・上越教育大学図書館蔵本は、この二録を「御覽」・「大日本著述附」として著録することから、享保八年の二録の上進を受けて、槩蔵目録の天和元年修本に「大日本著述附」を埋め木したものと考えられる。このうち上越教育大学図書館蔵本は、文政年間に納経された槩蔵と一具のものであるから、²⁰少なくとも江戸時代後期までは享保八年修本の状態のまま印造され続けていたことが確認できる。

なお前稿では、松永知海「後水尾法皇下賜正明寺藏初刷『黄檗版大藏経』目録」（前掲）の「『黄檗版大藏経』目録」二三五頁に著録される槧藏目録を、その内容構成から天和元年修本であると推定した。しかしながら高井氏は正明寺本を調査して、これが正明寺の槧藏（初刷）と一緒に納経されたものではなく、華藏寺本（本稿でいう天和元年修本）よりも後に印刷されたものであることを発見した。

松永氏によれば、正明寺には現在四部六冊の『大明三藏聖教目録』が経藏の南側第四列第九段の引出桐函に収藏されているとのことであり、各冊の内容構成は次のようである。

第一冊 上下合卷の一冊本。「再住中岳置正明寺常住」墨書朱印あり。⁽²¹⁾

第二冊 卷第三第四。卷第一第二欠。

第三冊 卷第一第二。

第四冊 卷第三第四。

第五冊 「進新刻大藏経表」・「上大藏経疏」・「北藏目錄総」・「藏函号字附」・御製序三通・卷第一第二。

第六冊 卷第三第四・「刻大藏縁起疏文」。

このうち第一至第四冊について、松永氏は「解題」の中で『黄檗版大藏経』として下賜された以外に、写本や儀式に使われたと思われる典籍「四十七冊のリスト中に挙げている。残りの第五・六冊は『黄檗版大藏経』目録」の末尾、『大方広仏新華嚴経合論』の次に經典番号一六五六として著録する。これは、松永氏がこの第五・六冊を正明寺の槧藏と一具のものであると判断したからであろう。しかしながら、その直前に著録される『大方広仏新華嚴経合

論』の末函は南側第四列第二段の引出桐函に納められており、槩蔵目録と引出桐函の位置が連続していない上、松永氏は第五・六冊が槩蔵と一具のものであると判断する根拠を提示していない。

高井氏は、前掲論文の中で、正明寺所蔵の槩蔵目録のうち一部の調査結果を記している。その内容構成は次の通りである。

上冊、扉絵・願文、「進新刻大藏経表」・「上大藏経疏」・「北藏目錄総」・御製序三通・卷第一第二下冊、卷第三第四・「御製藏経跋尾」・「御製統藏経序」・「大明統入藏諸集」・「北藏欠南藏函号附」・「大日本著述附」・「韋駄天像」

正明寺蔵の槩蔵目錄四部のうち、第一冊は一冊本であり、第二冊は卷第一第二が欠巻であるから、高井氏が見たのは第三・四冊か、第五・六冊のいずれかである。このうち第六冊卷第三の丁数は、松永氏「黄槩版大藏経」目錄によれば、十九丁である。これに対し、高井氏は卷第三巻末に「22陛 南昔字 阿毘達磨法蘊足論 十二卷今作十巻」および「弁 南聚字 立世阿毘曇論 十巻」を記録しない」と述べている。この部分を他の印本で確認すると、卷第三第二十丁に当たるから、高井氏の見た槩蔵目錄は第六冊卷第三と同じく第二十丁を落丁で欠いていたことになる。以上の点から、高井氏が調査したのは、四部六冊のうち卷第三第二十丁を欠く第五・六冊であったと考えて間違いない。

ここで注目すべきは、高井氏の調査によって第六冊に「大日本著述附」が付されていることが、新たに判明した点である。先述のように、槩蔵目錄に「大日本著述附」が埋め木されたのは享保八年のことである。よって「大日本

著述附」を含む第五・六冊が、正明寺所蔵の初刷の槧蔵と一具のものであったはずはない。この二冊は、享保八年以後に正明寺に納められたと考えるべきであろう。⁽²³⁾

2 天海版対照目録

江戸時代、嘉興蔵収録経典の覆刻を行ったのは、なにも黄檗山万福寺宝蔵院に限ったことではない。その数は槧蔵が開版されて以降激減するものの、寺院や書肆による覆刻本が数多く刊行され、中には槧蔵の入れ版に用いられたものもあった。⁽²⁴⁾『大明三蔵聖教目録』も例外ではなく、宝蔵院によって開版された槧蔵目録の他に、民間の書肆によって開版されたものが存在する。それが、ここに挙げる天海版対照目録である。

天海版対照目録は、江戸時代に大量に流布した版で、後印本も多い。また版式こそ槧蔵目録と一致するものの、異なる点も多々存在する。いまその異同を内容構成順に列挙する。

①題簽が異なる(図8)。縦長紙片に子持ち枠が刷られ、枠内は単線で上部・中部・下部の三枠に区切られ、下部の、普通千字文がある部分に、丸囲みした「■」がある点では槧蔵目録と同じであるが、上部の「支那／撰述」を「校／正」に作り、中部の題下にある小字「南蔵函号附」の右脇に、さらに小字で「訳者撰述者附之／倭蔵経函名附之」を加えており、下冊の題簽では「南蔵函号附」を「并偽経目録」に作る。

②巻首に扉絵・願文の一丁がない。

- ③鉄眼「進新刻大藏經表」・「上大藏經疏」・「刻大藏緣起疏文」を収録しない。
- ④槧藏目録の「北藏目録総」第三丁表第九行「六千七百七十一卷」を第八行「通共六百七十七函」の下に移し、第九行には小字双行注「倭本東叡山板六百六十五函 部数一千／四百五十三部 卷数六千三百二十三卷」を加えてある。
- ⑤「藏函号字附」第四丁裏第三行の一行は、槧藏目録のうち初印本・延宝六年至七年修本では千字文「史」字以下が墨丁であり、天和元年修本以後の印本では「北藏欠南藏函号附」の千字文十六字が刷られている。これに対し、天海版対照目録では墨丁・千字文十六字ともない。
- ⑥御製序三通の訓点の振り方が槧藏目録と異なる。また槧藏目録では無点であった「御製藏經跋尾」・「御製続入藏經序」に訓点が付してある。
- ⑦「大明太宗文皇帝御製藏經讚」第六丁裏第三行「永樂八年三月初九日」の下に小字双行注で「明朝第二太宗御宇当日本百一代後小松院／心永十七庚寅至天和三癸亥二百七十四年」と加えてある。
- ⑧「大宋三藏聖教序」第十二丁裏に、次に挙げる凡例二則を加えてある。
- 一 明藏倭藏共存本各経目上成一開相若倭藏無／本欠開相（倭藏者東叡山刊行経本也）
- 一 每首安一字者倭藏経函之名也若倭函之名同明函者不別記之
- ⑨槧藏目録は「北藏の千字文／（永樂南藏の千字文）經典名（卷数）」の形式で經典を著録するのに対し、天海版対照目録では、これに加えて、永樂南藏の千字文の上にはしばしば「○」印を付し、卷数の下には小字双行注で、訳著者名や、經典の別称・「倭目」の著録内容等を加えてある（図9）。卷数の下に注記を加えるスペースがない場合には、

經典の脇に傍注として加えてある。

⑩上欄外に、单枠で囲った千字文を加えてある經典が多い。

⑪卷第一卷末の第三十三丁裏第八行から第十行は、槩藏目録のうち初印本・延宝六年至七年修本では墨丁であり、天和元年修本以後は墨丁が削られて界線となっている。これに対し、天海版対照目録では墨丁となっている。

⑫卷第二卷末の第二十七丁裏第五行から第十行は、槩藏目録のうち初印本・延宝六年至七年修本では墨丁であり、天和元年修本以後は墨丁が削られて界線となっている。これに対し、天海版対照目録では墨丁となっている印本もあるものの、多くの印本では次の四部の經典を加え、さらに第四行にあった末題を第十行に移してある。

義楚六帖〈二十／四卷〉〈齊州開元寺講俱舍論賜紫明教大／師進釈氏六帖 義楚集〉

貞元新定釈教目錄〈三十／卷〉〈西京西明寺沙門／円照撰〉

○一切経音義〈一百卷今合／作五十卷〉〈翻経沙門／慧琳撰〉

○統一切経音義〈十卷今／作五卷〉〈翻経沙門／希麟撰〉

⑬卷第三卷末の第二十丁表第六行から第十行は、槩藏目録のうち初印本・延宝六年至七年修本では墨丁であり、天和元年修本以後は墨丁が削られて界線となっている。これに対し、天海版対照目録には墨丁・界線ともになく、無界無字となっている。⁽²⁵⁾

⑭「御製続人藏経序」末の第二十四丁表第一行「大明万曆十二年十一月二十日」の次行に小字双行注で「日本天正十二年申歲也至于／天和三癸亥年百十年也」と加えてある。

⑮ 壁藏目録の「北藏欠南藏函号附」は、巻第四の第二十七丁裏第一行から第二十八丁表第一行を占め、⁽²⁶⁾『統伝灯録』三十六卷・『古尊宿語録』四十八卷・『禪宗頌古聯珠通集』二十一卷・『仏祖統紀』四十五卷・『大明三藏聖教目録』三卷の五部の経典を著録する。このうち『大明三藏聖教目録』三卷は、その永樂南藏の千字文「塞」字が第二十七丁裏第十行にあり、「大明三藏聖教目録〈三卷〉」の部分⁽²⁷⁾が第二十八丁表第一行にある(図5)。これに対し、天海版対照目録では「大明三藏聖教目録〈三卷〉」が第二十七丁裏第十行の「塞」字の下にあり、第二十八丁がない。

⑯ 巻尾に唐・釈明佺等編『武周刊定偽経目録』一卷全十二丁を附録している。⁽²⁷⁾

⑰ 巻尾に韋駄天像がない。

次に、これらの異同から天海版対照目録がどのような特徴を持つ版本か考察してみたい。

① 天海版対照目録の題簽は、その開版に当たり、底本を「校正」し、「訳者撰述者」と「倭藏経函名」を付け加え、「偽経目録」つまり⑯『武周刊定偽経目録』一卷を附録したことを謳ったものである。

② 巻首に扉絵・願文、③ 本文の前後に鉄眼「進新刻大藏経表」・「上大藏経疏」・「刻大藏縁起疏文」があり、⑰ 巻尾に韋駄天像があるのは、壁藏目録の特徴である。このうち扉絵・願文・韋駄天像は、壁藏目録に限らず、一定の法則のもと壁藏の収録経典に綴じ込まれている。⁽²⁸⁾これらが点から考えると、天海版対照目録は宝藏院で開版されたものではない可能性が高い。

④ 「北藏目録総」第三丁表第九行に見える「倭本東叡山板六百六十五函 部数一千／四百五十三部 巻数六千三百二十三卷⁽²⁹⁾」の「東叡山」とは、天台宗の天海によって徳川家の菩提寺として開山された寛永寺(上野)のことである。

「倭本東叡山板」とは、寛永十四年から慶安元年にかけて天海が発願し、徳川家光の援助を得て開版した天海版大藏經のことである。

⑤ 「藏函号字附」第四丁裏第三行は、嘉興藏本を見ると、槩藏目録の初印本・延宝六年至七年修本と同じ形の墨丁がある。これに対し、槩藏目録のうち天和元年修本以後の印本では、この部分に「北藏欠南藏函号附」の千字文十六字が刷られている。もし天海版対照目録が天和元年修本以後の印本を底本としたのであれば、「北藏欠南藏函号附」の千字文が刷られているはずである。よって、その底本は嘉興藏本か、槩藏目録の初印本・延宝六年至七年修本のいずれかであり、重刊の際に、この墨丁を削り去ったことがわかる。

⑧ 「大宋三藏聖教序」末丁裏に見える凡例二則は、「明藏」・「倭藏」、つまり『大明三藏聖教目録』³⁰・天海版大藏經ともに収録する經典には經典名の上に「圀相」つまり丸印を付け、天海版大藏經にない經典には丸印を付けていないこと、また上欄外に首書される千字文は、天海版大藏經の千字文であり、千字文が「明藏」と同じ場合は特に注記しないことをそれぞれ説明したものである。槩藏目録との異同として挙げた⑨・⑩は、この凡例に沿って加えられたものである。また經典名の下にしばしば見える「倭目云…」³¹は、『日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録』との異同を注記したり、その著録内容を引用したものである。本節冒頭で、この版本を「天海版対照目録」と記すことにしたのは、以上のように、天海版大藏經にかかわる注記が随所に加えられているためである。

⑪⑫⑬槩藏目録に墨丁がある箇所には、嘉興藏本ではいずれも刊記がある。民間の書肆が嘉興藏本を覆刻する際にはその刊記を覆刻するか、不要なものとして無視するのが普通であり、墨丁として残して置くのは槩藏本ならではの

特徴である。天海版対照目録の巻第一第二に墨丁があるということは、その底本が嘉興藏本ではなく、槧藏本であったことを示している。また槧藏目録の墨丁は天和元年修本以後の印本では全てなくなっていることから、まだ墨丁が残っている初印本か延宝六年至七年修本を底本としたことがわかる。加えて槧藏目録の初印本が誤って巻第一の前に置く「大明続入藏諸集」を、誤らずに巻第四の後に置いていることから、その底本は初印本の誤りを正した延宝六年至七年修本であったと考えてよい。

次に、⑫天海版対照目録の中に、巻第二巻末の第二十七丁裏第五行から第十行が槧藏目録と同様に墨丁となっている印本と、『義楚六帖』等四部の経典が刷られ、末題が第四行から第十行に移されている印本とがある点について考えてみたい。両印本の版面を比較すると、同じ版木で刷られてはいるものの、後者の方が痛みが進んでいる。よって天海版対照目録が開版された当時は墨丁であり、後になって『義楚六帖』等が追刻されたことになる。

⑬「北藏欠南藏函号附」に著録される「大明三藏聖教目録〈三卷〉」の位置が槧藏目録と異なるのは、天海版対照目録が民間の書肆で開版された町版であることの証拠である。嘉興藏の収録経典の覆刻本には、宝藏院で開版されたものもあれば、町版もある。それを見分ける鍵は、嘉興藏本を忠実に覆刻しているかどうかにある。嘉興藏本『大明三藏聖教目録』を見てみると、「北藏欠南藏函号附」の「大明三藏聖教目録〈三卷〉」は、槧藏目録と同じく第二十八丁第一行にあるから、槧藏目録は嘉興藏本を忠実に覆刻していたことがわかる。これに対し、天海版対照目録では「大明三藏聖教目録〈三卷〉」が第二十七丁第十行にある。これは槧藏目録を重刊する際に、版木や紙の枚数を減らして経費を削減するため、意図的に行った措置と考えられる。このような措置は、民間の書肆で開版された嘉興藏の覆

刻本や槧藏の重刊本にしばしば見られるものである⁽³²⁾。以上の点から、天海版対照目録が町版である可能性は極めて高いといえる。

天海版対照目録が槧藏目録を忠実に覆刻していないことは、首尾に鉄眼の序跋がなかったり、訳著者等に関する注記や天海版大藏經の千字文等が新たに加えられている点によって容易に知ることができる。そればかりでなく⑥両本の訓点の異同箇所を比較すると、天海版対照目録の方がより送り仮名が多い傾向にあることから、槧藏目録を重刊する際に、その訓点を増訂していたことがわかる⁽³³⁾。

⑬卷尾に附録される唐・釈明佺等編『武周刊定偽経目録』一卷は、本来、唐の天冊万歳元年に編纂された『武周刊定衆経目録』巻第十四に附録される偽経⁽³⁴⁾の目録である。天海版対照目録は、先述のように、槧藏目録を底本としているが、これに附録された『武周刊定偽経目録』は槧藏本を底本としていない。槧藏本『武周刊定偽経目録』は、千字文「泰十」の第十七丁裏から第三十丁裏に収録されるのに対し、天海版対照目録のそれは字詰こそ同じ十行二十字であるものの、千字文がなく、丁数も全十一丁であり、著録經典の内容・順序等にも槧藏本と異なる点が多い⁽³⁵⁾。

それでは、天海版対照目録は何を底本として『武周刊定偽経目録』を附録したのであるうか。先述のように、天海版対照目録が天海版大藏經との異同を随処に注記している点に着目すれば、天海版大藏經所収の『武周刊定偽経目録』を底本としたと考えるのが自然であろう。しかしながら天海版大藏經本未見のため、この問題については後日に期したい。

次に、天海版対照目録の開版者が、底本に対して上記の増訂を行った理由を考えてみたい。それは槧藏目録の簡略

さと関係がある。そもそも槩蔵目録の著録事項は千字文・經典名・巻数だけの非常に簡略なものであり、訳著者名すら入っていない。また当時世に出ていた天海版大蔵経との収録經典の違いも明確ではなかったと思われる。そこで槩蔵目録を重刊するに当たり、訳著者名等を注記し、訓点をより詳しくし、さらに天海版大蔵経との対照目録としての機能を持たせ、偽経のリストである『武周刊定偽経目録』を附録したものと推測される。先述のように、天海版対照目録の開版者は民間の書肆であったと考えられる。彼らは営利出版を生業とするが故に、底本である槩蔵目録に様々な要素を付加することで、独自性を打ち出そうとしたとも考えられる。

次に、天海版対照目録の出版時期について考えてみたい。天海版対照目録には開版者を特定しうるような序跋・刊記の類は一切ない。しかしながら⑦「大明太宗文皇帝御製藏経讚」の末文「永樂八年三月初九日」の注記に「明朝第二太宗御宇、当日本百一代後小松院応永十七庚寅。至天和三癸亥、二百七十四年。」とあり、⑭「御製続入藏経序」の末文「大明万曆十二年十一月二十日」の注記に「日本天正十二甲申歳也。至于天和三癸亥年、百十年也。」とあり、それぞれ天和三年までの年数が注記されている。このことから、その出版年は天和三年と見てよからう。⁽³⁶⁾

天海版対照目録のうち巻第二巻末に墨丁が刷られた早印本には、成田山仏教図書館蔵本（請求記号四九一九六（ハ））・妙伝寺（京都）第二十九世住心院日義旧蔵の国立公文書館内閣文庫蔵本（請求記号二九七―八五）・関西大学図書館蔵本（請求記号L二一―四―五九二、内藤文庫⁽³⁷⁾）・駒沢大学図書館蔵本（請求記号二〇一―W四）の四部がある⁽³⁸⁾。これら四部の版面の状態を見比べると、駒沢大学図書館蔵本が最も早印である。

一方、巻第二巻末に『義楚六帖』等を追刻した後修本は、成田山仏教図書館蔵本二部（請求記号四九一九六（イ）・

ち〇〇〇三一三)、内閣文庫蔵本(請求記号二九七―八六)、岩瀬文庫(愛知県西尾市)蔵本、家蔵本三部をはじめ多数伝わり、書肆の奥付や蔵版目録の付された印本が多い。

家蔵本三部のうち二部には、下冊の末尾に奥付が付されている。そのうち一部の奥付は、次のようである。

書肆 東都 須原屋茂兵衛／同 伊八／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／

大阪 敦賀屋九兵衛／秋田屋太右衛門／

京都 勝村治右衛門坂

七人の書肆のうち、名前の下に「板」字のある勝村治右衛門が、この時の印造における主たる版元であったと見られ、江戸・大阪・京都の三都で手広く販売されていたことがわかる。⁽³⁹⁾

もう一部の家蔵本には、皇都書林文昌堂永田調兵衛の蔵版目録四丁が下冊の巻尾に付されている。永田調兵衛は、慶長年間から現代まで活動を続けている書肆であり、屋号を菱屋といい、文昌堂はその堂号で、主に仏書の出版・販売を行ってきた。初代から三代までは長兵衛、四代以降は調兵衛と名乗り、錦小路通新町西入町に店を構えていたが、天明八年の大火以後は下京区花屋町通西洞院西入へ移り、現在に至る。⁽⁴⁰⁾ この家蔵本の蔵版目録には「下京区花屋町通西洞院西入」とあるから、天明八年以後に刷られたものである。

なお宗政五十緒氏等の共同研究によれば、現在永田文昌堂に伝わる『文昌堂蔵板目録』の「雑仏部」に「明蔵目録」が著録されているとのことである。⁽⁴¹⁾ この「明蔵目録」は、天海版対照目録のことであると見てよからう。『文昌堂蔵板目録』は明治初期の九代目調兵衛の時代のものであるから、永田調兵衛が明治初期に天海版対照目録の版權を所有

していたことがわかる。

内閣文庫蔵本には、額田正三郎の蔵版目録一丁が付されている。蔵版目録は三段組で一段十九行からなり、全百九部を著録する。また丁表の上段第一行に、目録の篇題「一止人梓行書目」があり、丁裏の下段第十六行から第十九行に「(石大概如斯)／御書物 御経類品々／京都寺町通五条西橋詰町／伊勢屋額田正三郎蔵」とある。また丁表の上段第六行に「大明聖教目録(附偽経目録)」とあり、天海版対照目録そのものを著録する。これとほぼ同じ内容の蔵版目録が、成田山仏教図書館所蔵の『嵯峨天皇灌頂文』一卷(請求記号ち一七二一八。宥豊旧蔵本)の巻末に見える。同版であるが、篇題を「一止人蔵書目録」に作り、末尾の「御書物」の下に「所」字があり、百九部のうち九部の經典が異なる。両蔵版目録の版面の状態から、これらの異同は、内閣文庫蔵本が印刷される際に、『嵯峨天皇灌頂文』の蔵版目録の版木に埋め木をしたり、文字を削り取るなどした結果、生じたものであると見られる。

岩瀬文庫蔵本は、すでに高井氏によって調査されている。岩瀬文庫から取り寄せた書影によれば、巻第二卷末に『義楚六帖』等を追刻した後修本であり、冊尾の奥付位置には蔵版目録が半丁あり、その末尾に「皇都書林(京御幸町御池下ル町／菱屋孫兵衛板)」とある。⁽⁴²⁾菱屋孫兵衛は、姓は藤井、楼号を五車楼といい、明和頃から明治期まで活動した智積院の御用書肆であり、幕末に出版した画譜類等には五丁から約十丁の蔵版目録を付したものが少なくなかったという。⁽⁴³⁾

以上をまとめると、天海版対照目録は、天和三年、民間の書肆によって、槩蔵目録の延宝六年至七年修本を底本として重刊された町版である。その著録經典のうち天海版大蔵經の収録經典には、經典名の上に「○」印を付し、その

千字文を上欄外に加えてある。また各經典の巻数の下や脇に小字双行注の形で、訳著者名・經典の別称・天海版大藏經の目録である『日本武州江戸東叡山寛永寺一切經新刊印行目録』の著録内容等を加え、訓点を増訂し、巻尾に唐・釈明佺等編『武周刊定偽經目録』一卷を附録している。これらは利用の便を考えたものと言えることから、天海版対照目録の開版者は、槩藏目録が簡略にすぎる点に不満を感じ、槩藏目録に対して独自性を打ち出そうとして、これらの注記や訓点を付加した可能性がある。また天海版対照目録のうち早印本では、底本に倣い、巻第二巻末に墨丁があったが、後修本では『義楚六帖』等四部の經典が彫られ、末題が第四行から第十行に移されている。これら後修本には奥付や書肆の広告が付されているものが多く、⁽⁴⁴⁾勝村治右衛門・菱屋孫兵衛・額田正三郎・永田調兵衛等、藏版者を代えながら、大量に印造されていたことを確認できる。

明治以降の印本

『大明三藏聖教目録』の明治以降の印本には、次に挙げる槩藏目録四種がある。

- ・ 一切經印房武兵衛修本（以下称「印房修本」）
- ・ 昭和二十八年赤松識語印本（以下称「赤松印本」）
- ・ 赤松識語修本（以下称「赤松修本A」）
- ・ 赤松識語修本、増『統藏經値画一』（以下称「赤松修本B」）

いずれも江戸時代に宝蔵院で開版された槩蔵目録の版木を用いて、近代になってから刷られたものであるが、印房修本と、赤松印本・赤松修本A・赤松修本Bとでは印造者が異なる上、内容構成にもそれぞれ若干の異同が見られる。

印房修本には、奈良県立図書館蔵本（請求記号一八三・〇三一／タイミ／一〜二）がある。

江戸時代に印刷された印本、特にその最終段階と呼ぶべき享保八年修本に比べ、巻首の扉絵・願文と巻尾の韋駄天像がない。題簽は江戸時代の槩蔵目録と同版である。巻尾には「黄槩版其他諸経印刷発売元／京都市上京区木屋町通二条下ル／一切経 印房武兵衛」の奥付がある。⁽⁴⁵⁾この奥付から、この印本が宝蔵院で印造されたのではなく、一切経印房武兵衛によって印造されたものであることがわかる。

一切経印房は、寛文九年、宝蔵院の建立とともに木屋町二条に創設された。印房内には開祖鉄眼・二代宝洲を祀る祭壇が設けられ、「知蔵」の職を置いて、大蔵経の版木・版庫を管理させ、槩蔵の頒布を掌握させた。創設当時は、もっぱら版木の彫刻を行ったが、槩蔵完成後、版木が宝蔵院内の版庫に移され、印刷も版庫内の刷場で行われることになる⁽⁴⁶⁾、一切経印房では多数の使用人を使い、刷り上げた經典を製本したり、一般へ頒布する商行為を行うようになった。

しかし近代に入ると、この体制に大きな変化が生じた。赤松晋明「鉄眼一切経の経づくり」によれば、明治三十年頃⁽⁴⁷⁾に槩蔵の印刷権を「在家の経本屋」、つまり一切経印房に委任し、以後は営業的に取り扱われるようになったとい⁽⁴⁸⁾う。これにより、知蔵の役目は、版木の保存、鉄眼・宝洲両祖師の祭祀・顕彰に重点が置かれ、時々一切経印房に出張監督するのみとなり、槩蔵の印刷・製本・販売は一切経印房の責務となった。

その後、一切経印房は貝葉書院と改名したが、槩藏の販売部数の減少から次第に経営困難に陥り、その所有地を吉田神楽岡町の土地と交換し、一切経印房の家屋を売却するに至った。一方、宝藏院は、昭和七年、鉄眼に宝藏国師の諡号が下賜されたのを機に、昭和八年十二月、吉田神楽岡町の一切経印房の家屋を買収して改修し、新知藏寮を設け、昭和九年五月十九日には落慶法要が執り行われた。同年六月に貝葉書院は槩藏の印刷権を辞退し、同年八月から以後三十年間、寺町通三条の書肆其中堂に印刷権が渡ったが、その後再び貝葉書院に印刷権が戻り、現在に至っている⁽⁴⁹⁾。

一切経印房に印刷権のあった時期に印造・販売された槩藏の一つに、ネパール政府考古局の国立古文書館蔵本がある。この槩藏は、明治三十年代半ば、黄槩僧・仏教学者の河口慧海が購入し、ネパールのチャンドラ・シヤムシエル大王に献上したものである⁽⁵⁰⁾。高山龍三氏は、一九九八年・一九九九年の二度、国立古文書館を訪れて調査を行い、二篇の報告論文を公刊している⁽⁵¹⁾。その中に一切経印房の奥付の書影が掲載されていることから、明治三十年代半ばには、槩藏の印刷権がすでに一切経印房に渡っていたことを確認できる。

なお享保八年修本までは、巻第一第十二裏「番字薬師瑠璃光七仏本願功德経」の上に見える永楽南藏の千字文を「南豈字」に作るが、一切経印房の奥付を持つ奈良県立図書館蔵本では「唐本朝鮮／藏共欠本」に作る⁽⁵²⁾（図10）。この二行八字は、各行第四字の墨が最も濃く、左上に行くほど墨がかすれていくこと、字の大きさ・刷り具合が他の部分と異なることから、埋め木と見て間違いない。文政年間に印造された上越教育大学図書館蔵本にはこの埋め木がないから、文政年間以降に埋め木されたことになる。なおかつ、その字様が槩藏のそれと一見して異なることから、一切経印房に印刷権が渡った後に埋め木された可能性が高い⁽⁵³⁾。

赤松印本には、中央研究院歴史語言研究所傳斯年図書館蔵本（請求記号一六七〇〇一）がある。

江戸時代の槩蔵目録の巻首には、図1のように、槩蔵独特の扉絵があり、その丁裏には竜をあしらった牌の中に十六字の願文が刷られている。これに対し、赤松印本以降の印本では、その構図こそ江戸時代の槩蔵目録と同じものの、全く絵柄の異なる別版が用いられており（図11）、さらにその丁裏の牌には願文がなく、空欄となっていて、巻尾の韋駄天像もない。

傳斯年図書館には『大明三蔵聖教目録』が三部所蔵される。一部は赤松印本であり、他の二部は後述の赤松修本A・Bである。版面の状態から判断して、三部のうち赤松印本が最も早印である。赤松印本の表紙は灰色で、本文には朱・藍二色の色鉛筆による書き入れがある。朱筆は同館所蔵の槩蔵の函次、藍筆は各經典の冊数を表す。「刻大蔵縁起疏文」は、印房修本までは巻尾にあったが、赤松印本以降、巻首に移され、「上大蔵経疏」の次に置かれている。巻末には昭和二十八年に黄檗山宝蔵院第五十九代住持赤松晋明氏の記した識語がある。以下にその全文を挙げる。

黄檗鉄眼版一切経印行会 総裁賀陽元宮恒憲氏 参与黄檗不説師弘道監寺 竜興公宏会長等発願 江湖有縁頭紳
淑女協賛捐資端著成就仍而茲為酬恩加之勸募印施 上梓此三蔵聖教目録其他 所以久遠実成記念流布 伏願 宿
障自除善根益成者 今為 家先祖菩提頌一本第 号矣

昭和癸巳孟夏日

黄檗山宝蔵院五十九代住持法孫晋明仁賢識

この識語は、黄檗鉄眼版一切経印行会総裁の賀陽元宮恒憲氏⁽⁵⁴⁾、同参与の黄檗不説師⁽⁵⁵⁾・弘道監寺⁽⁵⁶⁾・竜興公宏会長等⁽⁵⁷⁾の

発願により、江湖有縁の紳士淑女の協賛・援助を得て、赤松晋明氏が指揮した槩蔵の印造事業が緒に就いたことを受けて、さらに印造資金を募り、昭和二十八年に『大明三蔵聖教目録』等を上梓した際に執筆されたものである。このときの発行部数は限定二百部であったと見られ、識語中の「第 号」は、そのシリアルナンバーを入れるためのものである。

つまり赤松印本は、昭和二十年代に赤松氏の指揮で開始された槩蔵印造事業が、昭和二十八年にある程度の成果を挙げたことを記念して、限定二百部印造されたものである。傅斯年図書館蔵本にはシリアルナンバーが入っていないが、この記念版のうちの一部であったと考えられる。

赤松修本Aには、家蔵本・中村菊之進氏寄贈の東洋文庫蔵本（請求記号未定）・傅斯年図書館蔵本（請求記号一六七〇〇）がある。

その内容構成は赤松印本と同じであるものの、昭和二十八年赤松識語から「参与黄檗不説師弘道監寺竜興公宏会長」十七字が削除されている。あるいは赤松修本A印造時の一切経印行会のメンバーが、昭和二十八年の限定二百部印造時と異なっていたのかもしれない。

傅斯年図書館蔵本の表紙は、同館所蔵の槩蔵と同じ路考茶色である。巻首の扉絵ののと付近に「合計二千一百〇三冊 52.11.23記」と鉛筆で書き込まれ、本文には槩蔵の函次がやはり鉛筆で書き込まれている。前者は傅斯年図書館所蔵の槩蔵の総冊数と受入日であり、後者はその函次である。これらの書き入れは、全蔵納品後、傅斯年図書館でその冊数・各函の内容を点検した際に記されたものと思われる。以上の点から、この赤松修本Aは槩蔵本体と一緒に傅

斯年図書館に納品されたと考えるのが妥当であろう。また「52123記」は民国五十二年十一月二十三日であり、昭和三十八年に当たるとなる。この年の九月二日、宝蔵院は槩蔵を台湾政府に送り、赤松晋明氏の令息純明・達明両氏が台湾に渡っている⁽⁶⁰⁾。傅斯年図書館所蔵の槩蔵は昭和三十六年頃印造されたと推測されることから、昭和三十八年に台湾政府に送った槩蔵が同館に収蔵された可能性が高い。

赤松修本Bには、家蔵本・傅斯年図書館蔵本（請求記号HPE〇三二七三三〇）がある。

その内容構成は赤松修本Aとほぼ同じであり、版面の状態にもさしたる変化は見られないが、巻末に康熙五年孟夏重訂の『統藏経値画一』全十六丁が付されている（図12）。また傅斯年図書館蔵本三部のうち唯一書き入れがない。傅斯年図書館に槩蔵が収蔵されて以降、入手したものと思われる。

家蔵本は一帙四冊のうちの一冊である。帙題簽に「北蔵 黄槩鉄眼版一切経目錄〈全〉■」とあり、さらに帙中央に赤地の料紙を貼り付け、「記念上呈 宝蔵院」と墨書する。『大明三蔵聖教目錄』以外の三冊は次の通りである。

『般若波羅蜜多心経』・『瑞竜鉄眼禅師仮字法語』各一卷を合冊したもの。題簽には「瑞竜／開山」鉄眼和尚仮字法語」とある。『般若波羅蜜多心経』は、全二丁、丁付けは第十四丁表から第十五丁表までの槩蔵本である。第十五丁表の末題後に「為浄寛院某癸卯再版」と印刷されている。『瑞竜鉄眼禅師仮字法語』の巻末には元治二年村上勘兵衛・八幡屋四郎兵衛・土田治助連名の識語が埋め木されている。

『金光明経』四卷拵音釈、一冊。題簽に「経 金光明経〈卷一之／四終〉上 化」とあり、各巻巻末に寛文十一年鉄眼刊記を持つ槩蔵本である。

『黄檗開山普照国師年譜』二巻、一冊。題簽に「○ 普照国師年譜（上下）」とあり、刊記はない。

この一帙四冊の奥付には、いずれも赤松識語があるが、その文面が赤松修本Aと完全に同じなのは『大明三蔵聖教目録』だけであり、他の三冊には「昭和癸巳孟夏日」七字がない。これは、この三冊を実際に印造した年が昭和二十八年から相当離れていたためであろう。

また『般若波羅蜜多心經』第十五丁裏に「昭和乙巳臘月記念／安□平常心／宝蔵院主□晋明」と墨書し、「昭和」の上部に朱印「道光」、「晋明」の左わきに朱印「宝蔵／院主」・「晋／明」を捺す（図13）。昭和乙巳は昭和四十年である。『金光明經』巻第四第二十三丁裏に朱印「版／大蔵経／庫」（大蔵経版庫）を捺す。『金光明經』の赤松識語には、「第 号」の中に朱印「無判」、末尾に朱印「宝蔵／院主」を捺す。

これらの状況から、この一帙四冊は、昭和四十年頃に宝蔵院で赤松晋明氏によって印造・成帙されたものであり、赤松氏みずから墨書を加え、かつ朱印を捺し、何者かに進呈したことがわかる。ということは、赤松修本Bは、遅くとも昭和四十年には印造されるようになっていたと見てよい。

赤松修本Bに附録される『続蔵経値画一』は、嘉興蔵の正蔵部分の頒価目録『遵依北蔵字号編次画一』（順治十六年編纂）に附録された続蔵部分⁶²の頒価目録である。その末尾に「康熙五年重訂」とあることから、康熙五年に再改訂されたものであることがわかる。康熙五年といえは、嘉興蔵の続蔵部分が完成した年であるから、その際に正蔵・続蔵の統一頒価を再改訂したのであろう。⁶³なお赤松修本Bの『続蔵経値画一』にはその頒価が記されていないが、槩蔵購入者が槩蔵の頒価と勘違いしないように、嘉興蔵本を覆刻する際に頒価を彫り込まなかったのかもしれない。

『続蔵経値画一』がいつ頃宝蔵院で開版されたかは不明であるが、隠元が槩蔵開版のために鉄眼に与えた嘉興蔵の中に、これが含まれていなかったことだけは確かである。そもそも『続蔵経値画一』は、『遵依北蔵字号編次画一』の附録として、『刻蔵縁起』一卷・『大明三蔵聖教目錄』四巻とともに、嘉興蔵の冒頭に収録されていたものであり、嘉興蔵と一具のものとして日本にもたらされたはずである。槩蔵の底本に用いられた嘉興蔵は、万治元年に大阪の商人勝性印によって隠元に寄進されたものと言われており、万治元年、つまり順治十五年以前に印造されたと推測される。よって、この嘉興蔵に康熙五年重訂の『続蔵経値画一』が含まれていたはずはなく、康熙五年、つまり寛文六年以後、日本にもたらされて重刊されたと考えられる。

その名が槩蔵出版史上に初めて現れるのは、享保十五年である。その根拠は、『全蔵漸請千字文朱点』簿第七冊六三八番梵釈寺（江州日野岡本）条の「⑥享保十五年戊戌年八月十日 百拾卷四帙外目錄一帙統蔵目錄一部」という記録である。これだけでは『大明続入蔵諸集』か、『続蔵経値画一』か判然としないが、梵釈寺条には続けて「⑦同十七壬子三月八日 百八十卷八函同日渡続蔵内華嚴合論一部四函」とあり、続蔵經典の入蔵に関する記録が見られることと、また、この頃より『全蔵漸請千字文朱点』簿に続蔵の開版・納経に関する記録が散見するようになることから、この「続蔵目錄一部」は『続蔵経値画一』を指すと考えるのが妥当であろう。『続蔵経値画一』に関する記録は『全蔵漸請千字文朱点』簿中、他に見当たらないが、梵釈寺条の記録によれば、遅くとも享保十五年には開版されていたと考えよ⁽⁶⁴⁾。

『続蔵経値画一』が享保十五年頃に開版された後、昭和になって赤松氏が再発見するまで、⁽⁶⁵⁾これがどの程度世の中

に広まり、実際に利用されたのかはわかっていない。江戸時代印造の槧蔵や槧蔵目録を丹念に調査すれば、あるいは『続蔵経値画一』を附録したものが見つかるかもしれないが、これまで調査した槧蔵目録の中で、これを附録するものは赤松修本Bを置いて他にない。

おわりに

槧蔵目録には、江戸時代に四種、近代に四種、計八種の印本がある。その初印本は寛文九年から延宝六年までの間に開版されたものであり、槧蔵の販売予定目録として使うため開版を急いだのか、本来巻尾にあるべき「大明統入蔵諸集」を、誤って巻首に置いている。延宝六年至七年修本はこの誤りを正したものであり、延宝六年七月に後水尾法皇に槧蔵を上進した際に付された「進新刻大蔵経表」が、新たに巻首に収録されている。この時期までの印本には各巻巻末に墨丁が残されていた。天和元年修本では、天和元年に槧蔵を徳川綱吉に上進するために書かれた「上大蔵経疏」が、新たに巻首に収録されており、各巻巻末の墨丁にすべて界線が彫り込まれている。享保八年修本では、この年に鉄眼・宝洲の両語録が中御門天皇に上進されたことを受けて、両語録を著録した「大日本著述附」が「北蔵欠南蔵函号附」の末尾に埋め木されている。

以後、享保八年修本が江戸時代を通じて印造されていたが、明治三十年代になって槧蔵の印刷権が宝蔵院の手を離れ、一切経印房に渡ったため、槧蔵目録も一切経印房武兵衛の奥付を付して印造されるようになった。この印房修本

では、巻首の扉絵と巻尾の韋駄天像がともになく、巻第一に著録される「番字薬師瑠璃光七仏本願功德経」の永楽南蔵の千字文「南豈字」が「唐本朝鮮／蔵共欠本」に埋め換えられている。

昭和九年、槩蔵の印刷権は京都の書肆其中堂に渡った。その後、宝蔵院第五十九代住持赤松晋明氏の代になって宝蔵院主みずから槩蔵の印造に取り組むようになり、黄槩鉄眼版一切経印行会の支援を受けて、昭和二十八年に一応の成果を挙げた。それを記念して二百部限定で印造された槩蔵目録が赤松印本である。巻首に江戸時代の槩蔵目録と絵柄の異なる扉絵があり、扉絵の丁裏に願文がなく、巻尾に韋駄天像がなく、奥付位置に昭和二十八年赤松識語が付されている点に特徴がある。

昭和三十二年二月、槩蔵の版木が重要文化財に指定され、さらにその版木収蔵庫が完成した。これを記念して、昭和三十六年、赤松氏は『般若波羅蜜多心経』・『鉄眼禪師仮字法語』を印造した。この頃印造された槩蔵の一つが、昭和三十八年九月、台湾政府によって購入された。現在、中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館に所蔵される槩蔵がこれであると推測される。このとき槩蔵本体と一緒に納品されたとおぼしき槩蔵目録が赤松修本Aであり、昭和二十八年赤松識語から「参与黄槩不説師弘道監寺童興公宏会長」十七字が削除されている点に特徴がある。

赤松氏は槩蔵を印造する過程で、嘉興蔵の続蔵部分の頒価目録である『続蔵経値画一』の版木を、版木収蔵庫内で発見した。そして昭和四十年頃、その版木を使って印造した『続蔵経値画一』を、槩蔵目録の末尾に付すようになった。これが赤松修本Bである。その昭和二十八年赤松識語は赤松修本Aと全く同じであるが、これと同じ時期に印造されて同帙に納められた三冊の黄槩版では、赤松識語から「昭和癸巳孟夏日」七字が削除されており、時間の経過と

ともに、次第に赤松識語に手が加えられていく様子を見て取れる。

槩蔵目録は、槩蔵の開版開始とほぼ同時期に開版され、以後、黄槩宗と皇室・幕府との関わりの中で、同じ版本に手を加えながら、昭和に至るまで約三百年間印造され続けてきた。槩蔵の購入希望者が内容見本や収録経典リストとして購入する場合も少なくなかったであろうから、その印刷回数は槩蔵本体よりはるかに多かったと推測される。それにもかかわらず、昭和期の印本を見ても、その版面の状態は比較的良好である。このことから、宝蔵院は開版に当たり、良質な版材を選定し、その後も適切に保存管理してきたことを窺い知ることができる。

一方、天和三年、民間の書肆によって槩蔵目録の延宝六年至七年修本が重刊された。これが天海版対照目録である。その底本である槩蔵目録に対して独自性を打ち出すためか、天海版大蔵経と対照できるような配慮が随所になされている他、注記の追加・訓点の増訂・『武周刊定偽経目録』一卷の附録等がなされている。そのうち早印本には巻第二巻末に墨丁が残されているが、後印本ではそこに『義楚六帖』等四部の経典が彫り込まれている。この後印本は蔵版者を代えながら江戸時代を通して大量に印造され続け、現在でも各所に伝わっている。

末筆ながら、資料の閲覧・複写に当たっては、岩瀬文庫・大谷大学図書館・関西大学図書館・国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・駒沢大学図書館・上越教育大学図書館・中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館・東京大学総合図書館・奈良県立図書情報館・成田山仏教図書館等の諸機関にお世話になった。ここに記して厚く御礼申し上げます。

- (1) この点については、別稿で論じる予定である。
- (2) 入れ版と改刻の状況については、松永知海氏の諸論文、拙著『成田山新勝寺一切経堂収蔵黄檗版大蔵経目録』（成田山新勝寺、二〇一〇年一月）等を参照。
- (3) 大谷大学図書館蔵本（明版大蔵経 塞（板帙二二二）の書影による。
- (4) 匡廓寸法は、『豊山長谷寺拾遺』第四輯之二明版一切経（総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、二〇〇八年四月）所載の『大明三蔵聖教目録』の書誌による。大谷大学図書館蔵本は原本未見のため不明。
- (5) 「蔵函号字附」の第四丁裏第三行「史」字以下は墨丁である。
- (6) 松永知海編『全蔵漸請千字文朱点』簿による『黄檗版大蔵経』流布の調査報告書（佛敎大学アジア宗敎文化情報研究所、二〇〇八年三月。以下称『全蔵漸請千字文朱点』簿）を参照。例えば、第一冊一五番直指庵（嵯峨）条に「②二千六十卷 目録帋帙 五百十九冊」とあるのをはじめ、「目録」つまり『大明三蔵聖教目録』が槩蔵とともに納経されている様子に至る所に確認できる。
- (7) 「上大蔵経疏」の末尾には「天和辛酉 年 月 日」とあるだけで月日が入っていないが、天和元年は延宝九年九月二十九日に改元されているから、執筆した季節は冬と見てよい。
- (8) 『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年三月）「墨格」条を参照。
- (9) 鉄眼の刊記は木記の形を取っているが、その記年は必ずしも開版された年とイコールではない。拙著『成田山新勝寺一切経堂収蔵黄檗版大蔵経目録』（前掲）五一〜五二頁を参照。
- (10) 正明寺には現在もこの初刷の槩蔵が収蔵されている。松永知海「後水尾法皇下賜正明寺蔵初刷『黄檗版大蔵経』目録」（『仏敎大学総合研究所紀要別冊附録』、仏敎大学総合研究所、二〇〇四年十二月）を参照。

(11) この問題については、別稿で論じる予定である。

(12) なお「北藏欠南藏函号附」のうち「塞」字函の「大明三藏聖教目録〈三卷〉」だけ嘉興藏に収録されていない。これは本稿で取り上げている『大明三藏聖教目録』と同名であるが、嘉興藏本が北藏の目録を底本とする四卷本であるのに対し、「大明三藏聖教目録〈三卷〉」は永楽南藏の目録であり、両書は全くの別書である。

(13) 前稿では、後水尾法皇への槩藏（初刷）の寄進が天和元年に完了したことが関係していると考えたが、ここに訂正する。
(14) 「上大藏経疏」中に「…一時鏤鏤尺蠖蟻之微忱、千載流通頼殿下之威徳。功既竣矣、幸莫大焉。敢乘盛時、特齋上献。」とある。

(15) 鉄眼は將軍家へ槩藏の寄進を申し出たが許されず、元禄三年、鉄眼の法弟宝洲の代になってようやく五代將軍綱吉に大藏経を献上できたという。赤松晋明『鉄眼』（雄山閣、一九四三年九月）二七四～二七五頁、松永知海『黄槩版』の利用
(16) 『智山学報』第五十五号、二〇〇六年三月、また上田靈城『浄嚴和尚伝記史料集』（名著出版、一九七九年八月）「浄嚴和尚行状記」一九二～一九三頁を参照。

(17) 『全藏漸請千字文朱点』簿第三冊二一九番華藏寺（參州）条には「壬午二月念八日 全藏渡了 參州 華藏寺」とあるだけで、槩藏目録と一緒に納経されたとは記されていない。しかしながら華藏寺藏本が天和元年修本であり、その後、槩藏目録に補刻の手が入るのは、後述のように、享保八年のことであるから、时期的に見て、華藏寺の槩藏と一具のものであることに何ら矛盾はない。高井氏は華藏寺の槩藏と槩藏目録の両方を実際に調査しているので、その装訂等を考慮して、この槩藏目録が華藏寺の槩藏と一具のものであると判断したのであろう。なお高井氏は『全藏漸請千字文朱点』簿に依拠して元禄十四年の施入とするが、「壬午」は元禄十五年である。

(18) 題簽はそれ以前の印本や近代の印房修本（後述）と若干異なり、「北藏 大明三藏聖教目録 ■」に作り、題下に「南藏函号附」がない。各印本の題簽の字様を見比べると、上越教育大学図書館藏本では「大」字の第二筆の払いが帰一寺旧藏本・

印房修本よりも横に長く伸びている等、明らかに字様が異なる。よって上越教育大学図書館蔵本のみ別の版本で刷られた題簽が添付されたことがわかる。

- (18) 家蔵の元禄四年序刊貝葉書院後印本による。なお題簽には「(御/覽) 鉄眼禅師遺録(上下)」■とあり、「大日本著述附」と同じく、「御覽」の二字がある。

- (19) なお『全藏漸請千字文朱点』簿を見ると、「遺録」の名の初出は、正徳三年の安養寺(洛陽京極)への納経の記録中である。続いて同五年に四件、享保に入り、元年に一件、二年に二件、三年に二件、四年に十二件、五年に三十七件、六年に十九件、七年に十七件とあり、槩蔵に遺録を付して納経されること自体は享保八年以前にも行われていた。

- (20) 上越教育大学図書館所蔵の槩蔵は、文政四年に越後国の宮崎甚助が全蔵を一括購入したものである。『上越教育大学所蔵黄檗鉄眼版一切経目録』(上越教育大学附属図書館、一九八八年三月)を参照。

- (21) 「中岳」は、黄檗僧中岳元執(享保十二年嗣法)のことであろう。宝暦八年、華頂文秀(後の万福寺二十五世)が律から禅へと換衣した際の師が、当時正明寺住持であった中岳元執である。大槻幹郎等編『黄檗文化人名辞典』(思文閣出版、一九八八年十二月)六四・五二四頁を参照。

- (22) なお高井氏は、巻第三巻末の『阿毘達磨法蘊足論』・『立世阿毘曇論』について、印造の際にあえて削除されたかのように記しているが、槩蔵目録の巻第三は延宝六年至七年修本以来第二十丁までであるから、意図的なものではなく、単なる落丁と見るべきである。

- (23) 他の三部四冊の中に初刷の槩蔵と一具のものがあるとすれば、それは本節で挙げた初印本・延宝六年至七年修本・天和元年修本のいずれかと、その内容構成が一致するはずである。

- (24) 野沢佳美「江戸時代における明版嘉興藏輸入の影響について」(『立正大学東洋史論集』第13号、二〇〇一年九月)・拙著『成田山新勝寺一切経堂収蔵黄檗版大藏経目録』(前掲)「四 新勝寺本の異版について」を参照。

- (25) なお家蔵本三部のうち一部（原裝二冊、改裝一冊）では、第二十二丁裏の匡廓内全面に墨丁がある。他の二部は第二十二丁裏を刷っていない。
- (26) 丁付けは巻第四から「北蔵欠南蔵函号附」まで通しとなっている。巻第四が第一丁から第二十二丁表、「御製蔵経跋尾」が第二十二丁裏、「御製続入蔵経序」が第二十三丁表から第二十四丁表、「大明続入蔵諸集」が第二十四丁裏から第二十七丁表である。
- (27) このことは、『浄土真宗教典志』（東洋文庫蔵天明二年刊京都丁子屋庄兵衛後印本）巻第三にも「大明三蔵聖教目録四卷明万曆十二年十一月成。巻尾附周刊定偽経目録。」と著録されている。なお印本によっては、巻尾ではなく、巻首に綴じられているものもまれにある。
- (28) 拙著『成田山新勝寺一切経堂収蔵黄檗版大蔵経目録』（前掲）「三 調査の概要と報告」を参照。
- (29) この函数・部数・卷数は、天海版大蔵経の末尾に収録される『日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録』巻第五末題の後に記されるものと全く同数である。『日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録』の函数・部数・卷数については、『昭和法宝総目録』第二卷所収本（慶安元年刊高山寺蔵本）、『第貳回大蔵会陳列目録』所載の律宗戒学院蔵本の解題等によった。
- (30) 天海版対照目録の言う「明蔵」は、『大明三蔵聖教目録』だけでなく、それによって構成される嘉興蔵をも含んでいると考えてよからう。
- (31) 例えば巻第三「仏説犯戒罪軽重經」の下には「倭目云、漢隋唐録並云世高所訳、恐非。」とあり、『日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録』にもこれと同文がある（『昭和法宝総目録』第二卷所収本では「恐」を「恕」に誤る）。
- (32) 拙著『成田山新勝寺一切経堂収蔵黄檗版大蔵経目録』（前掲）「四 新勝寺本の異版について」を参照。
- (33) 例えば「大明太宗文皇帝御製蔵経讀」全二丁について見ると、槩蔵目録が百九十箇所に送りがないを付すのに対し、天海版

対照目録では二百三十八箇所に付しており、四十八箇所も多い。

(34) 偽経とは、印度伝来の翻訳経典に対して、一見翻訳経典のようでありながら、実は中国で撰述された経典のことを言い、

歴代の經典目録編纂者によつてその抽出と排除が行われた(『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)「偽経」条を参照)。

(35) 例えば、槩蔵本では「宝頂経一卷 浄土経七卷／正頂経一卷 法華経一卷／勝鬘経一卷／已上五経南斉永元年出時年九

歳」に作るころ、天海版対照目録では「宝頂経一卷」の下に「南斉永元年出時年九歳」と注し、以下の四經典の下に

「同前」と注し、「正頂経一卷 法華経一卷」を逆順に著録する。また槩蔵本「波羅奈経一卷」の「奈」を「捺」に作り、

「優婁頻経一卷」の「婁」を「樓」に作り、「最妙初教経一卷」の「教」を「殺」に作る等、両本の異同箇所は枚挙に暇がない。

(36) 『第二十二回 大蔵会展観目録』は、内藤乾吉蔵の烏田蕃根手沢本一冊を「天和三年刊」として著録する(『大蔵会展観目

録』(文華堂書店、一九八一年十一月)三八六頁を参照)。その刊年を「天和三年刊」とするのは、本稿同様、「大明太宗文

皇帝御製蔵経讚」・「御製続入蔵経序」の末文の注記に依拠したものであろう。なお、この印本は現在関西大学図書館の内

藤文庫中に所蔵されている(後述)。

(37) 冊尾の副葉数丁に『続蔵経値画一』を補写する。

(38) 高井氏が調査したのは、四部のうち駒沢大学図書館蔵本である。高井氏は、「北蔵目録総」が天海版大蔵経に言及せず、巻

第二巻末の『義楚六帖』等が削除されているとするが、同館より取り寄せた書影を見たところ、他本と同じく「北蔵目録

総」に天海版大蔵経の総数に関する注記があった。また『義楚六帖』等は削除されているのではなく、墨丁となっており、

天海版対照目録の早印本であることがわかった。

(39) このように、奥付に複数の書肆が並ぶ版本を「相合板」と呼ぶ。相合板の主たる版元は、最後尾の書肆であったり、版元

名の下に「板」・「版」・「梓」・「梓行」等の文字が加えられた書肆であったり、朱印の捺された書肆であったり、様々であ

- る。中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（岩波書店、一九九五年十二月）一八三―一八五頁を参照。
- (40) 「近世における永田文昌堂藏板書の研究」（龍谷大学仏教文化研究所紀要）第27集、一九八九年二月・『日本古典籍書誌学辞典』（前掲）「永田調兵衛」条を参照。
- (41) 「近世における永田文昌堂藏板書の研究」（前掲）を参照。
- (42) 高井氏は「兵衛」二字を「判明せず」とするが、岩瀬文庫本の書影を見ると「兵衛」である。
- (43) 『日本古典籍書誌学辞典』（前掲）「菱屋孫兵衛」条を参照。
- (44) 高井氏は、末尾に書肆の広告、つまり蔵版目録を付すものと、付さないものがある点について、前者を一般向けに頒布されたもの、後者を寺社向けに頒布されたものと述べる。しかしながら普通に考えれば、版木が転売されて、様々な書肆の手に渡る中、印造に際し、蔵版目録を付した書肆もあれば、付さなかった書肆もあったというにすぎないであろう。また、かつては蔵版目録が付された印本でも、後に改装されて、これが廃棄されたものもあったと思われる。なお『日本古典籍書誌学辞典』（前掲）「蔵版目録」条によれば、書肆の蔵版目録は享保年間頃より多く見られるようになったとのことである。
- (45) 一切経印房武兵衛の名が刷られた奥付は、現在伝わる壁蔵の離れ本や黄檗宗関係の単行本にしばしば見受けられる。例えば、成田山仏教図書館蔵『黄檗二代賜紫木菴和尚年譜』二卷（元禄八年京都岡元春刊京都一切経印房武兵衛後印本）には、『大明三藏聖教目録』の奈良県立図書館蔵本と同版の奥付がある。
- (46) 赤松晋明『鉄眼』（前掲）二二五―二二八頁を参照。
- (47) 『大法輪』23（12）（一九五六年十二月）を参照。なお中村秀光『鉄眼寺記録』（一九六四年十月序）明治四十四年条には「〇六月一日印房敷地建物一切経版木を貝葉堂河村泰太郎に賃貸す」とある（五四頁を参照）。「貝葉堂」は一切経印房のことである。

- (48) 松永知海「研究ノート」黄檗版大藏経―版庫の移転を中心として（『黄檗文華』第116号、一九九六年十二月）を参照。
- (49) 赤松晋明「鉄眼」（前掲）一二七～一二八頁、松永知海「研究ノート」黄檗版大藏経―版庫の移転を中心として（前掲）を参照。
- (50) 『全藏漸請千字文朱点』簿』第二十二冊二二八六番に「川口慧海」の名で見え、その「経文情報」欄に「①朱点あるも請了年月記載なし」とあり、「備考」欄に「☆（全藏了）」、「経文情報No.①は欄外記載がなく、朱印No.62だけが押されている。朱点簿には全藏分の朱印あり」とある。二二八四番の「森江佐七」の納経年が明治三十五年、二二八七番の「同（大清国浙江省杭州府）文学堂長伊藤賢道」の納経年が明治三十七年であるから、その間に購入したものと考えてよい。ネパール大王への一切経の献上は、そのすぐ後の、一九〇五年三月に行われている。
- (51) 「河口慧海献上の藏経を求めて―一九九八年ネパール報告」（『黄檗文華』第118号、一九九九年五月）・「河口慧海のおもい―大王への献上一切経調査・一九九九年ネパール報告」（『黄檗文華』第119号、二〇〇〇年五月）。
- (52) 「番字葉師瑠璃光七仏本願功德経」は、檠藏開版以来の欠経である。
- (53) 他に印房武兵衛が黄檗版の版木に埋め木をした例としては、中央研究所蔵の檠藏中、「大般若波羅蜜多経」卷第二十一第七十二第百一第百十一第百三十一第百九十一の各巻巻末の刊記「旧弘所京都木屋町通二条下ル所一切経印房」、卷第四百五十一第百八十一の各巻巻末の刊記「旧弘所京都二条通木屋町下ル所一切経印房」がある。
- (54) 賀陽恒憲（一九〇〇～一九七八）氏のことである。明治四十二年に賀陽宮家を継承し、陸軍中將に至り、第二次世界大戦後、昭和二十二年に臣籍降下した。「元宮」とあるのは皇籍を離脱したからである。
- (55) 寺岡不説（一八九一～一九六二）氏のことである。法諱仁説、室号無字室。昭和二十四年に第十八代黄檗宗管長・黄檗山禪堂師家に就任し、同三十一年に退任した。臨濟会「昭和・平成 禅僧伝 臨濟・黄檗篇」（春秋社、二〇〇〇年三月）八二頁、有馬頼底『茶席の禅語大辞典』（淡交社、二〇〇二年二月）七一―八頁を参照。

(56) 中村弘道（一八八七―一九六七）氏のことか。法諱弘久、昭和三十九年に第二十一代黄檗宗管長に就任し、四十二年二月遷化。監寺は、禪宗寺院で寺内の寺務一切を運営監督する役職の名称であり、現在では住職に代わって寺務を司る僧の意味でも用いられる（『岩波仏教辞典』（前掲）「監寺」条を参照）。

(57) 「竜興」は、黄檗山万福寺塔頭子院のひとつ竜興院のことか。開基は、万福寺第三代慧林禪師。公宏は人名と思われるが未詳。

(58) 「端著成就」とは、赤松氏によって開始された槩蔵印造事業が緒に就いたことを意味するが、具体的に何をもって緒に就いたと述べているのかは定かではない。傅斯年図書館所蔵の槩蔵には、奥付に昭和二十八年赤松識語のある冊と昭和三十一年赤松識語のある冊とが混在していることから、少なくとも昭和二十八年識語のあるものはこの識語が書かれた時期までに印造された可能性があると考えてよからう。拙稿「中央研究院傅斯年図書館蔵黄檗版大蔵経目録」（『東洋文庫書報』第41号、二〇一〇年三月）「前言」を参照。なお赤松氏は「鉄眼」「一切経の経づくり」の中で「昭和時代になってからは、（在家の経本屋による頒布の部数は）指を屈する程になった。そこで今度は宝蔵院住職自らが大悲願を発して、鉄眼祖師の昔に還って、造経という法戦の指揮を執るに至ったわけである」（一）（内は筆者補）と述べており、宝蔵院住職みずから印造事業に取り組むこととなった動機が、槩蔵の販売部数減少にあったことがわかる。

(59) 赤松氏は「鉄眼一切経の経づくり」（前掲）の中で「前年来、蔵経目録二百部を抜き刷りしたことがある。」と述べている。「鉄眼一切経の経づくり」は昭和三十一年公刊であるから、「前年来」とは昭和二十八年を指すと考えてよからう。

(60) 中村秀光『鉄眼寺記録』（前掲）六五頁を参照。

(61) 傅斯年図書館所蔵の槩蔵の末函に当たる第二百五十函第一冊『鉄眼禪師遺録』巻末には、赤松晋明氏が昭和三十六年に書いた識語が綴じられている。

(62) なお、ここでいう「続蔵部分」とは、『大明三蔵聖教目録』に附録される「大明続入蔵諸集」のことではない。そもそも嘉

興藏は、北藏の正藏と続藏、つまり『大明三藏聖教目録』四巻と「大明統入藏諸集」をその正藏としている。嘉興藏にとつての続藏とは、これ以外に追加入藏された經典のことを指す。

- (63) 『昭和法宝総目録』第二巻所収の『藏版経値画一目録』の『続藏経値画一』は、大谷大学所蔵の民国九年刊本（康熙十六年重訂）を底本とし、大谷大学蔵刊本を校本の一つとして挙げている。赤松修本Bの『続藏経値画一』は、この大谷大学蔵刊本と内容的に近い。

- (64) なお嘉興藏の正藏の頒佈目録である『遵依北藏字号編次画一』は、日本で重刊された形跡がない。その最大の理由は、その内容が槩藏目録とほぼ同じであったためである。『遵依北藏字号編次画一』の存在価値は、嘉興藏の頒佈を記した点にあるが、この頒佈は当時の日本人にとって全く必要のないものであったことも関係していたと思われる。

- (65) 赤松晋明「鉄眼一切経の経づくり」（前掲）を参照。なお松永知海氏の調査によつて、『続藏経値画一』の版本が現在も宝蔵院の版木収蔵庫に収蔵されていることが確認されている。松永知海「黄蘗宗宝蔵院所蔵版本について——とくに蔵外典籍を中心とした課題——」（『香川孝雄博士古稀記念論集仏教学浄土学研究』永田文昌堂、二〇〇一年三月）を参照。

（財団法人東洋文庫研究員）

【和刻本『大明三藏聖教目錄』諸本対照表】

内容構成	樂藏目錄										天海版対照目錄			
	初印本		延宝六至七年修本		天明元年修本		享保八年修本		印房修本		赤松修本B		構成	丁数
	構成	丁数	構成	丁数	構成	丁数	構成	丁数	構成	丁数	構成	丁数		
扉絵 (俵)	①	lab	①	lab	①	lab	①	lab	①	—	①	lab	①	—
扉絵 (無俵)	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—
連新刻大藏経表	×	—	×	1-4a	②	1-4a	②	1-4a	①	1-4a	①	1-4a	×	—
上大藏経疏	×	—	×	—	③	1-3b	③	1-3b	②	1-3b	②	1-3b	×	—
北藏目錄総	③	1-3a	③	1-3a	④	1-3a	④	1-3a	③	1-3a	③	1-3a	①	1-3a
藏函号字附	④	3b-4b3* 1	④	3b-4b3* 1	⑤	3b-4b3* 2	⑤	3b-4b3* 2	⑥	3b-4b3* 2	⑥	3b-4b3* 2	②	3b-4b3
明太宗御製序	⑤	5a-6b	⑤	5a-6b	⑥	5a-6b	⑥	5a-6b	⑤	5a-6b	⑤	5a-6b	③	5a-6b
唐中宗御製序	⑥	7a-10b	⑥	7a-10b	⑦	7a-10b	⑦	7a-10b	⑥	7a-10b	⑥	7a-10b	④	7a-10b
宋太宗御製序	⑦	11a-12a	⑦	11a-12a	⑧	11a-12a	⑧	11a-12a	⑦	11a-12a	⑦	11a-12a	⑤	11a-12a
〔凡例〕	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	⑥	12b
卷第一	⑪	1-33b7* 3	⑧	1-33b7* 3	⑨	1-33b7	⑨	1-33b7	⑧	1-33b7	⑩	1-33b7	⑦	1-33b7* 3
卷第二	⑫	1-27b4* 3	⑨	1-27b4* 3	⑩	1-27b4	⑩	1-27b4	⑨	1-27b4	⑪	1-27b4	⑧	1-27b4* 5
卷第三	⑬	1-17b* 4	⑩	1-20a4* 3	⑪	1-20a4	⑪	1-20a4	⑩	1-20a4	⑫	1-20a4	⑨	1-20a4* 6
卷第四	⑭	1-22a	⑪	1-22a	⑫	1-22a	⑫	1-22a	⑩	1-22a	⑬	1-22a	⑩	1-22a
御製藏経跋尾	⑮	22b	⑫	22b	⑬	22b	⑬	22b	⑫	22b	⑭	22b	⑪	22b
御製藏経起序	⑱	13a-14a1	⑬	23a-24a1	⑭	23a-24a1	⑭	23a-24a1	⑬	23a-24a1	⑮	23a-24a1	⑫	23a-24a2
大明藏入藏経集	⑲	14b-17a	⑭	24b-27a	⑮	24b-27a	⑮	24b-27a	⑭	24b-27a	⑯	24b-27a	⑬	24b-27a
北藏欠南藏函号附	⑳	17b-18a1	⑮	27b-28a1	⑯	27b-28a1	⑯	27b-28a1	⑮	27b-28a1	⑰	27b-28a1	⑭	24b-27a
大日本普迹附	×	18a3-10* 3	×	28a3-10* 3	×	—	⑰	28a4-8	⑯	28a4-8	⑱	28a4-8	⑮	27b1-10
藏経経値一	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	⑲	1-16b* 3	×	—
武周刊定偽経目錄	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	⑳	1-11a
刻大藏経起序文	②	1-2b	⑯	1-2b	⑰	1-2b	⑱	1-2b	⑰	1-2b	⑲	1-2b	×	—
赤松識語	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	×	—	⑳	—
草紙六後	×	—	⑰	1a	⑱	1a	⑲	1a	×	—	×	—	×	—

〔注〕 * 1 「史」字以下有墨丁。 * 4 18丁以下欠。
 * 2 「史」字以下有「合」至「塞」字。 * 5 後修本無墨丁、刻義楚六帖等四部、至27b10。
 * 3 卷末有墨丁。 * 6 20a有墨丁。



図2 槧藏目錄卷第一卷頭
(東洋文庫藏初印本)



図1 槧藏目錄の扉絵
(東洋文庫藏初印本)

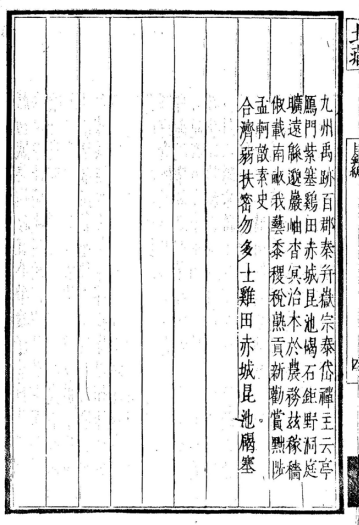


図4 槧藏目錄「藏函号字附」末の
千字文追刻部分 (家藏天和元年修本)

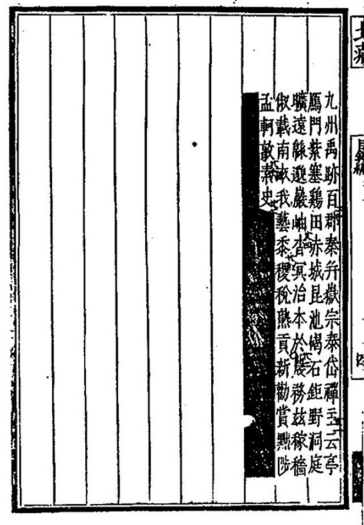


図3 槧藏目錄「藏函号字附」末の墨丁
(東洋文庫藏初印本)

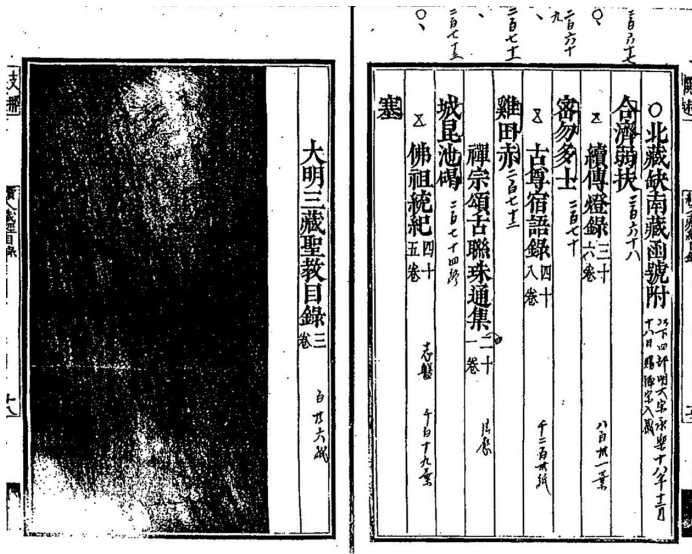


図5 槩藏目録「北藏欠南藏函号附」末の墨丁
(東洋文庫蔵初印本)

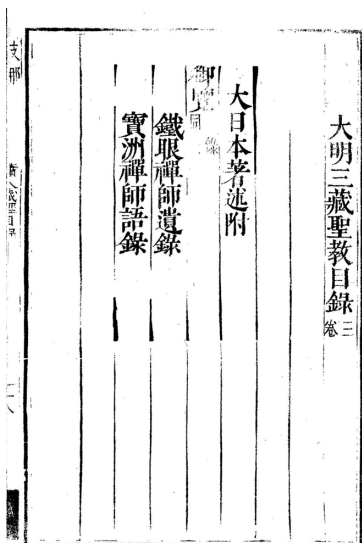


図7 槩藏目録「北藏欠南藏函号附」末の
「大日本著述附」追刻部分（家蔵赤松
修本A）

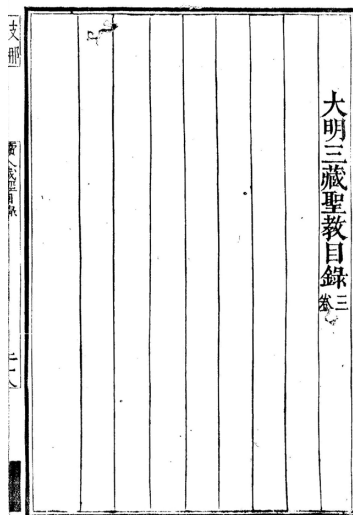


図6 槩藏目録「北藏欠南藏函号附」末の
界線追刻部分（家蔵天和元年修本）



図8 槩藏目録と天海版対照目録の題簽
 (右 家藏天和元年修本、中 家藏赤松修本A、左 家藏天海版対照目録)

<p>字一 摩訶般若波羅蜜鈔經 卷五</p>	<p>字二 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字三 小品般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字四 道行般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字五 淡 光讚般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字六 河 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字七 葛海藏 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字八 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字九 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十一 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十二 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十三 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十四 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十五 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十六 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>	<p>字十七 摩訶般若波羅蜜經 卷十</p>
------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-------------------------	-------------------------	---------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------

図9 天海版対照目録巻第一丁裏 (右、家藏本) と槩藏目録の同丁 (左、家藏天和元年修本)



図11 槩蔵目録の扉絵（家蔵赤松修本B）

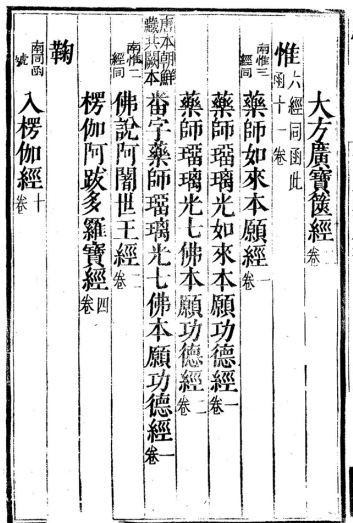


図10 槩蔵目録卷第一12丁裏
（家蔵赤松修本A）

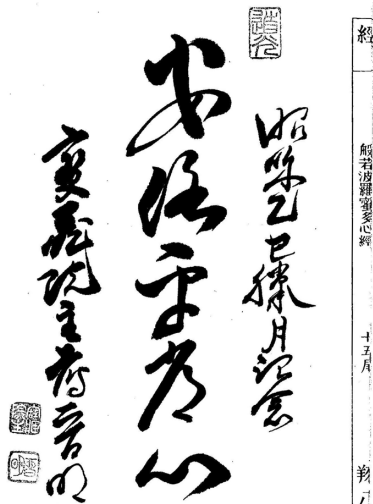


図13 『般若波羅蜜多心經』卷末の赤松晋明氏識語（家蔵赤松修本Bと同軼本）

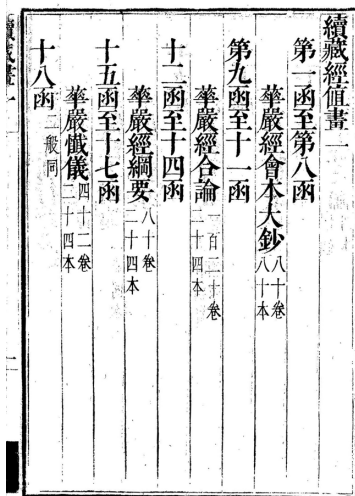


図12 槩蔵目録の「続藏經值畫一」巻首
（家蔵赤松修本B）

